

浜降祭 ～鶴嶺八幡宮の神輿を中心に～

松本美虹¹

はじめに

平成 29 年（2017）7 月 17 日（月・祝）に開催された浜降祭の際、鶴嶺八幡宮の神輿渡御に同行させていただいた。本稿では、鶴嶺八幡宮の神輿を中心に、前日の準備、神輿渡御の行程、当日の流れを報告する。

浜降祭は茅ヶ崎市、寒川町にある神社の約 30 基の神輿が浜に集結し、禊を行う行事である。昭和 53 年（1978）には神奈川県が無形民俗文化財に指定された。

鶴嶺八幡宮の神輿渡御は、鶴嶺八幡宮の関係団体である「鶴嶺神輿愛好会」（以下、通称である「鶴神会（つるしんかい）」）が担っている。神輿の担ぎ手は浜降祭の前から神輿を担ぐ練習を重ねてきた。それは宮立ち後、トラックで浜まで来て国道 134 号から担ぎ出す神社が多い中、鶴嶺八幡宮は往復路ともに自力渡御で浜降祭を行う伝統を継承するためでもある。

1 浜降祭とは

（1）起源

起源は諸説あるが、代表的な 2 点をご紹介します。

- ① 天保 9 年（1838）、寒川神社の神輿が国府祭（こうのまち）に渡御した際、帰り道である相模川の渡し場で寒川の氏子が争い、川に流された。数日後、南湖の網元・孫七が漁の時に、ご神体を見つけ、寒川神社に届けた。これをきっかけに毎年、寒川神社の神輿がお礼参りとして南湖の浜で「禊（みそぎ）」を行うようになった。お礼参りを行った日は 6 月 30 日だったらしい。
- ② 『新編相模風土記稿』に掲載されている話。鶴嶺八幡宮では禊の神事を行うため、毎年、浜辺へ神輿渡御を行っていた。

（2）開催日の変動

その後、①と②の伝承が合体。それまで旧暦 6 月 29 日に開催されていたが、稲作の繁忙期と重なるため、明治 9 年（1876）に新暦 7 月 15 日に変更した。その際、祭の名称は「みそぎ」神事から現在の「浜降祭」となった。

約 120 年間、毎年 7 月 15 日に開催されてきたが、平成 9 年（1997）に「海の日」である 7 月 20 日に変更された。そして平成 16 年（2004）、祝日の法改正により第 3 月曜日（「海の日」）に変更。現在に至る。

（3）神輿の鎮座する位置

当日の朝に浜降祭に参加するすべての神輿が浜に集まり、予め決められた位置に鎮座する。鶴嶺八幡宮と寒川神社以外の神輿は毎年、位置が異なる。鶴嶺八幡宮と寒川神社の位置のみが変わらないのである。これは、浜降祭の起源に鶴嶺八幡宮と寒川神社が深く関わっていることを示している。

2 神輿に関する予備知識

（1）鶴嶺八幡宮の神輿の担ぎ手

鶴神会会員の他、鶴嶺八幡宮近辺在住ではない鶴神会会員の親戚、知人などが、鶴嶺八幡宮の半被を借用して担いでいる場合もいる。

また、神輿の関係者の繋がりである神輿連の繋がり、他の団体から担ぎ手をお願いしている。例えば、茶色に「甲斐駒」と記された半被を着た人達は山梨より来ているとのこと。また青色に「集」と記された半被を着た人達もいる。

（2）太鼓橋通過時

太鼓橋を神輿が通過する際、太鼓橋上には 2 名が立っており、通過を補助する。通過時の時系列は、下記のとおり。

① 前方の棒が太鼓橋を通過

前方の棒を担いでいた担ぎ手は、棒を補助者に

預けた後、太鼓橋の横を通り、先に進む。前方の棒を預かる補助者は、棒にタオルを下から上に掛け、タオルを持って棒を上につける。棒は2本あるので、2名はそれぞれの棒にタオルを掛ける。その際、棒は補助者の足元にある。太鼓橋の高低差が急なためである。前方の棒が太鼓橋を通過した後に、担ぎ手は棒を受け取る。

② 神輿本体が太鼓橋を通過

太鼓橋の幅は神輿1基が通る程度で高低差が急なので、通過時、担ぎ手は太鼓橋の上には上がれない。神輿本体が太鼓橋を通過する際、補助者は橋の端に立つ必要がある。

③ 後方の棒が太鼓橋を通過

前方の棒2本と同様に、後方の棒2本もタオルで持ち上げる。後方の棒の担ぎ手も、前方の棒の担ぎ手と同様に動く。

(3) ウマ(こしだい) (輿台)

神輿を下ろす時に使用する。笛で「ピー」という合図があると神輿の動きは止まり、神輿下に2台のウマが入れられ、上に神輿を配置する。神輿をウマ上に配置した直後は歓声が沸き、担ぎ手達は安堵の様子である。

(4) タンス

神輿の土台となる台輪の左右側面に2点ずつ付いているかん（取っ手の形）を持ち、台輪に叩く行為を「タンス」と呼ぶ。左右側面それぞれにタンスを担当する人が2名ずつ立つ必要がある。

(5) 茅ヶ崎甚句・掛け声

神輿渡御の間は、道の途中で神輿を上下に動かす時もある。その際、人々の声がなくなる時はなく、常に茅ヶ崎甚句、掛け声は続いている。

① 茅ヶ崎甚句

スピーカーで歌われる。高校生が歌う場合も多くあり、甚句の継承を垣間見ることができた。甚句の間に、担ぎ手、まわりにいる人達が声を掛ける。

② 掛け声

「ドッコイ、ドッコイ」「ドッコイソーリヤー」「前へ、前と」などの掛け声がある。

甚句に合わせ掛け声を掛け、調子が合ってくると自然と鈴が鳴り出し、甚句、タンス、鈴の音が重なり合うのは相州神輿独特のものである。

(7) 神輿ブーム

昭和55年(1980)頃に神輿ブームが起こり、市内に神輿が増加した。茅ヶ崎、南湖、西久保・日吉神社、矢畑・本社宮、今宿・松尾大神、下町屋・神明神社で神輿が制作された。

(8) 鶴嶺八幡宮の半被・タオル

鶴嶺八幡宮の関係者は半被、赤色のタオルを首、頭に巻いている。半被の表には「鶴嶺八幡宮」。裏には「浜」の字と、鶴の絵があらわされている。



写真1 半被の表



写真2 半被の裏にある絵

2 前日の流れ

浜降祭の前日である7月16日(日)に行われる。神輿の組立とテント張りに分かれ、それぞれで作業を行う。その他に寒川神社と贈答品の交換が行われる。

(1) 神輿の組立

浜降祭前日の午前8時から11時30分まで行われる。鶴嶺八幡宮にある神輿殿より神輿を出し、組立、拝殿前に配置する。



写真3 鶴嶺八幡宮にある神輿殿

(2) テント張り

テントは担ぎ手が休憩し、朝食を食べる場所として使用する。

テント張りの作業人数は、高校生を含めた10名。午後2時に車で鶴嶺八幡宮を出発し、浜へ行く。午後2時45分頃に「海の家」に入る。鶴嶺八幡宮以外の祭関係者と会い、一緒に食事する。食事中は祭の話で盛り上がり、祭を心待ちにしている様子がうかがえた。

その後、地面に釘を打ち、テントを張る。複数名が休憩できるテントを設置する必要があるため、鉄パイプなどの様々な道具を使用する。テント設置終了後、午後3時50分に鶴嶺八幡宮に到着。

(3) 寒川神社と贈答品の交換

午後1時45分頃、寒川神社の方が来訪され、鶴嶺八幡宮にポスター(2点)、団扇(数点)などが渡された。鶴嶺八幡宮も、寒川神社にタオル(数点)を渡した。

3 当日の流れ

7月17日(月・祝)の午前1時から午後2時台まで、時系列で説明する。

(1) 午前1時34分

境内に関係者が集まってくる。境内にある神楽殿には、大太鼓、小太鼓が並べられている。神楽殿横にある奉名板には、奉納者の名前・金額が記入された紙が貼られている。

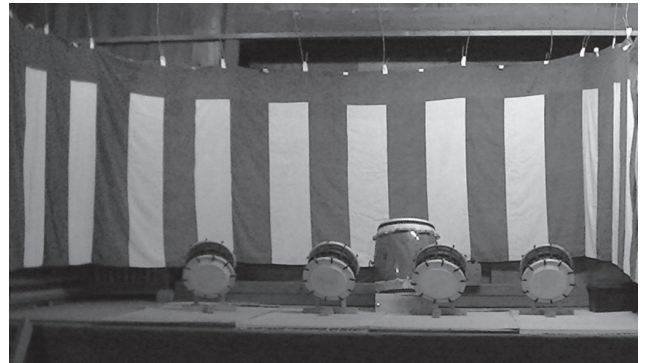


写真4 鶴嶺八幡宮にある神楽殿



写真5 奉納者の名前・金額を示す大きな板

(2) 午前1時55分～2時08分

神輿を置くためのウマが境内に運ばれる。

(3) 午前2時09分

西久保祭はやし保存会の提灯が取り付けられたトラックが神社前に到着。荷台には数人が乗り、小太鼓を叩いている。

(4) 午前2時17分

境内にある神楽殿にて、大太鼓、小太鼓の演奏。出発前に西久保・日吉神社、円蔵・神明大神宮、

矢畑・本社宮の神輿が迎えに来る。初めに西久保・日吉神社の神輿が鶴嶺八幡宮に到着。西久保・日吉神社の神輿の担ぎ手が来ている半被には「睦」とある。次は、円蔵・神明大神宮の神輿が到着。担ぎ手の半被には円蔵の円の旧字体である「圓」が記されている。西久保・日吉神社と円蔵・神明大神宮の神輿は、境内を練り所定の位置に着いた。

(5) 午前2時21分

神輿を止めた後は、鶴嶺八幡宮の関係者より担ぎ手達に冷たいお茶が振る舞われる。

(6) 午前2時28分 矢畑・本社宮の神輿が到着。

(7) 午前2時50分

拝殿前にある鶴嶺八幡宮の神輿をその場で動かす。特に移動するわけではない。動かす際は、誘導者がスピーカーで呼び掛ける。

(8) 午前3時01分 挨拶

各神社の代表者が拝殿前の階段上に並び、中央で鶴嶺八幡宮の代表者が階段下にいる担ぎ手達にスピーカーで挨拶。代表者の「おはようございます」の言葉より開始。神輿は左回りで旋回するようにとの呼び掛け。最後に一本締めで終了。

(9) 午前3時04分

各々の神輿が担ぎ出され、境内よりすぐに出発するわけではなく、方向転換をし、鶴嶺八幡宮の神輿が拝殿から降りてくるのを待つ。

(10) 午前3時09分 ^{みやだち}宮出

鶴嶺八幡宮の神輿を拝殿前より移動。鶴嶺八幡宮の拝殿前は目の前が階段となっており、拝殿前にある神輿は階段を下りる必要がある。階段を下りる際はスピーカーで「ゆっくり、ゆっくり」という誘導がある。階段を下りた後、しばらくは境内で鶴嶺八幡宮、西久保・日吉神社、円蔵・神明大神宮、矢畑・本社宮（鶴嶺四社）の神輿四基がほぼ同一箇所揃えて担がれ、「ドッコイ、ドッコイ」の掛け声の他に茅ヶ崎甚句も聴こえてくる。



写真6 神輿四基（鶴嶺八幡宮、西久保・日吉神社、円蔵・神明大神宮、矢畑・本社宮）

(11) 午前3時20分

鶴嶺八幡宮、西久保・日吉神社の神輿が太鼓橋の上を通過。通過時はスピーカーで「ゆっくり、ゆっくり」「肩を入れて」などの誘導がある。無事に通過した後は、拍手がある。

(12) 午前3時22分

矢畑・本社宮の神輿が太鼓橋の上を通過。

(13) 午前3時53分 一の鳥居を通過。

(14) 午前5時12分 浜に入る手前の信号を通過。

(15) 午前5時18分 浜に到着。

(16) 午前5時23分 神輿を担いで海に入る。



写真7 海に入る神輿と担ぎ手達

(17) 午前5時26分

鶴嶺八幡宮、西久保・日吉神社、矢畑・本社宮、円蔵・神明大神宮の神輿が竹で製作された鳥居の下を通過。通過後、すぐに神輿の所定位置まで行くのではなく、神輿四基はその場で揃えて横一列に並び威勢よく担いでいる。これは鶴嶺四社の見

どころでもある。

(18) 午前5時35分 浜の所定位置で止まる。

その後、次々と他の神社の神輿が浜に入ってくる。神輿の所定位置に到着した神輿の担ぎ手達は、神輿前で一本締め。担ぎ手の一人が神輿前の高い所に立ち、拍子木を使用していた。

(19) 午前7時05分 神事開始。

神事の間、神輿の担ぎ手は朝食をとる。

(20) 午前7時57分

鶴嶺八幡宮の神輿が鳥居下を通過。その後、鶴嶺八幡宮の所定位置に設置されていた竹に取り付けられていた櫓を取り外す。

(21) 午前9時00分

鶴嶺八幡宮の神輿が一つ目の休憩所であるハマミナに到着。神輿を止め、休憩する。

(22) 午前9時22分

出発が呼び掛けられる。出発当初、女性のみが担ぐ「レディースタイム」が設けられた。

神輿の担ぎ手は全員が男性というわけではないが、比較的男性の方が多い。女性は男性に比べて背が低い場合が多いので、担ぐ時に肩の高さが異なる。担ぎ手が女性の場合、肩の高さが近く、お互いに担ぎやすくなるのである。しばらくは女性のみが担ぐが、疲れてくると、そのうち少しずつ男性と交代していく。

担ぎ手の女性は、主に婦人会、自治会有志の方たちである。

(23) 午前10時01分

高架化された東海道線の下を潜る。

(24) 午前10時10分

2つ目の休憩所であるモリタ宮田工業の茅ヶ崎工場に到着。工場の敷地内に入っても、すぐに神輿を下すのではなく、建物入口前で神輿を上下に練り歩きながら茅ヶ崎甚句を続ける。その後、所定の止める場所に移動。会社より冷たい飲み物などが振り回れる。



写真8 モリタ宮田工業・茅ヶ崎工場に神輿が到着

(25) 午前10時19分

山梨より担ぎ手として手伝いに来た団体と鶴神会で一本締めを行った後、山梨の団体は帰る。

(26) 午前10時30分 神輿が宮田を出発。

(27) 午前11時05分

3つ目の休憩所であるA箇所に着。スイカ、お貸し、冷たい飲み物が振る舞われた。

(28) 午前11時32分

神輿がA箇所を出発。その後、鶴嶺八幡宮の参道である松並木を渡御。

(29) 午前11時55分頃

鶴嶺八幡宮の太鼓橋を通過。

(30) 午後12時04分 鶴嶺八幡宮に到着。

鶴嶺八幡宮の境内に入る階段の前で笛の合図があり、「ドッコイ、ドッコイ」の掛け声がなくなり、神輿はゆっくりと境内へ上がっていく。

(31) 午後12時05分

境内に入った後、すぐに止まるのではなく、しばらくは境内を練り歩き、神楽殿では大太鼓、小太鼓が神輿の掛け声に合わせて演奏している。

(32) 午後12時16分

拝殿前の階段下にて、茅ヶ崎甚句に合わせ、神輿は上下にあおられている。その後、笛の合図があり、神輿はゆっくりと階段を上がる。まわりからは「ゆっくり、ゆっくり」と声が掛かる。階段を上った後は再度、茅ヶ崎甚句と共に神輿が上

下にあおられ、その後、茅ヶ崎甚句が終了し、神輿がウマの上に配置された。

(33) 午後 12 時 19 分

拝殿前の階段前に関係者が立ち、階段下の担ぎ手、見物客に挨拶し、最後は三本締めで締め括った。

(34) 午後 12 時 20 分

担ぎ手、見物客に豚汁、お稲荷さん、キュウリ、枝豆、お菓子、お茶などが振る舞われた。担ぎ手、見物客は、境内で休憩をとられていた。



写真 9 豚汁、お稲荷さんなど



写真 10 キュウリ、枝豆、お菓子

(35) 午後 1 時

会場の片付け。当日中に片付けるのは、竹の鳥居、神輿、提灯。その他は 7 月 23 日(日)午前中に片付ける。片付け後、直会を行う。

(36) 午後 2 時 16 分

境内に鶴神会の会員が集まり、会長からの挨拶後、三本締めで終了した。

おわりに

本稿は浜降祭の中の、鶴嶺八幡宮の神輿渡御に特化した視点でまとめている。本来であれば、参加するすべての神輿それぞれの準備から片付けまでの様子を調べ、全容を明らかにすることで浜降祭全体がみえてくるはずだ。しかし、それについては筆者一人では力不足である。将来的な話だが、複数名でグループをつくり、手分けして調べるなど、全体を網羅する必要がある。

浜降祭の後継者について。全国的に祭は後継者不足と言われている。しかし、浜降祭では高校生が茅ヶ崎甚句を歌い、担ぎ手として活躍していた。若い世代が今後も参加することで現場のノウハウなどを覚え、後継者育成に繋がれば、浜降祭も持続できる。現在の状態を継続していただきたいと思う。

謝辞

この度、神輿に同行させていただいた鶴嶺八幡宮、鶴嶺神輿愛好会、氏子の方々には大変お世話になりました。おかげで神輿渡御の行程など、詳細を記録できました。また、宮司をはじめとした関係各所の方々にも、この場をお借りして改めてお礼を申し上げます。

参考文献

・福田アジオ他 2000『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館

¹ 茅ヶ崎市教育委員会社会教育課
茅ヶ崎市文化資料館 元学芸員

平成 29 年「浜降祭」 鶴嶺八幡宮の神輿渡御行程

※「まっぷ de ちがさき」(<https://www2.wagmap.jp/chigasaki/Portal>) より作成

①西浜海岸 ②ハマミーナ ③モリタ宮田工業・茅ヶ崎工場 ④太鼓橋

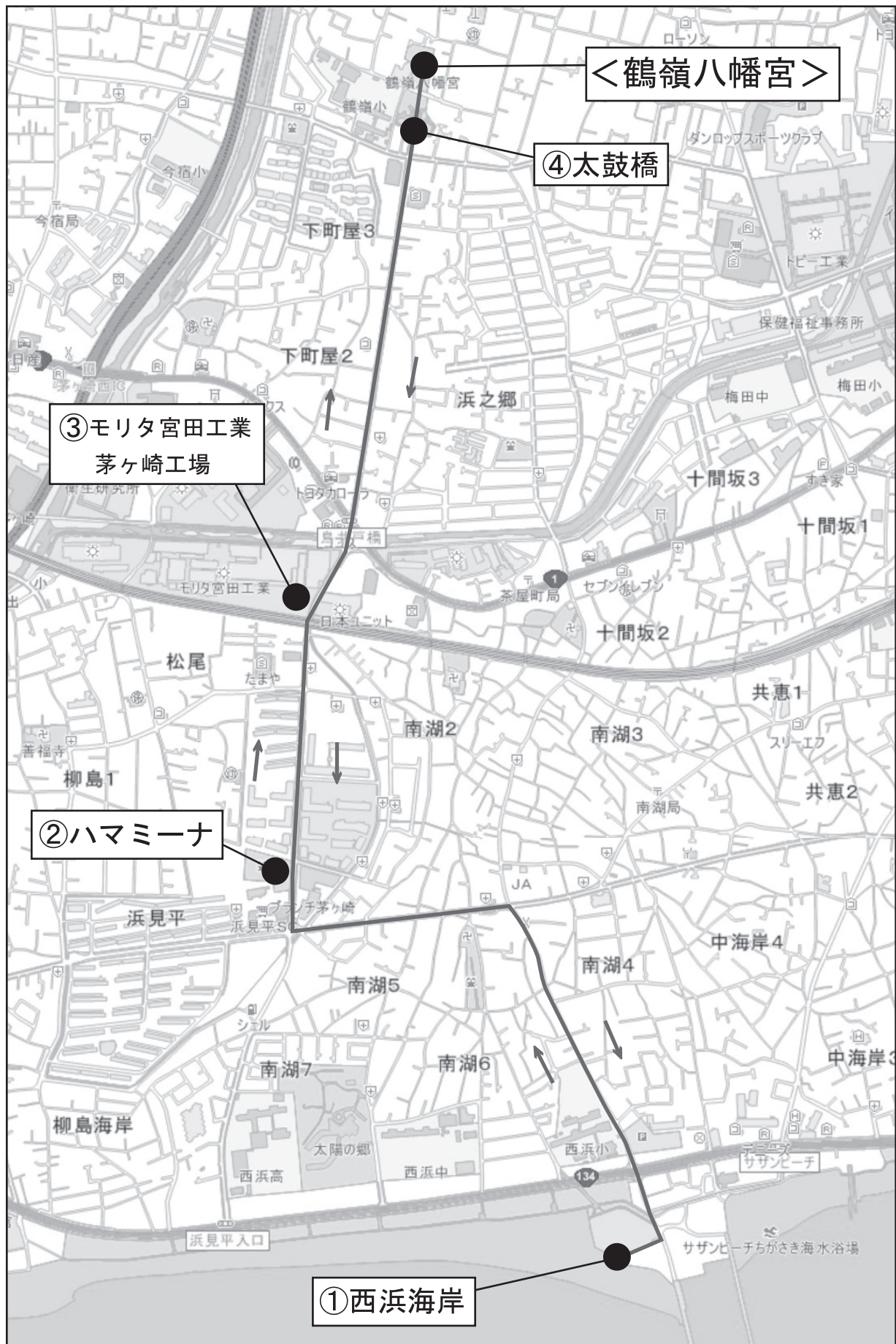




写真 11 神輿と共に海へ向かう担ぎ手達



写真 12 浜降祭広報部の車上の看板



写真 13 東海道線の下を潜る神輿と担ぎ手達



写真 14 鶴嶺八幡宮に到着する神輿と担ぎ手達